

茨木市安威0号墳から出土した鉄製品（2）

河野 正訓・清水 邦彦

1. はじめに

安威<sup>あい</sup>0号墳は三島平野を縦断して流れる安威川の西岸の丘陵一帯に位置する安威古墳群中の最も西に位置する前期古墳である。1981年に発掘調査がおこなわれ、三島地域の古墳編年表（森田2006など）に載る前期古墳でありながら、詳細な報告はなされていない。筆者たちは安威0号墳がもつ情報の重要性を鑑みて、前号の館報において、鉄製品および粘土槨の紹介および若干の検討をおこなった（河野・清水2016、清水2016）。

本稿では安威0号墳の遺物出土状況、および前回報告の脱稿後新たに所在が明らかになった鉄製品を紹介するとともに、安威0号墳の再評価を試みるものである。

なお、古墳の概要等については前回報告で述べたため、割愛して論をすすめる。（清水）

2. 安威0号墳の遺物出土状況

遺物出土状況図（図1・2）を作成した。廣瀬2014で紹介された粘土槨平面図に、A～C群の遺物出土状況図をあわせこんだものである（註1）。以下、図1・2、写真1および奥井1982の記述を参考に、安威0号墳の遺物出土状況についてみていきたい。

(1) 1号粘土槨

1号粘土槨の遺物は、すべて粘土槨内部のU字形床面上からの出土である（奥井1982）。

東小口付近で鉄製品4点が出土した。鉄<sup>やりがんな</sup> 鈍1と鉄<sup>とうす</sup> 刀子1を粘土槨と直交するかたちで並べて置かれていた。これらを挟むように、鉄斧1、鉄鎌1が粘土槨と平行に近い状態で置かれていた。

棺内中央付近で上方作系浮彫式神獸鏡が鏡面を上に向けた状態で1点出土している。また、鏡より西へ40cmの辺りで玉類（勾玉1点、管玉26点、小玉10数点）が出土したとされる（奥井1982）。

(2) 2号粘土槨

棺内中央付近で、斜縁神獸鏡が鏡面を上に向けた状態で、1点出土している。鏡の上面やその周りからは石釧片4点が出土している。また、鏡の下およびその周辺からは、玉類（丸玉10数点）が出土している。

鏡のすぐ東側からは、鉄斧2、鉄斧3、鉄<sup>のみ</sup> 鑿1、鉄鈍2、鉄鎌2、鉄刀子2、鉄刀子3が出土している（註2）。これらの鉄製品の下には棺材が遺存しており、その内面には赤色顔料が塗布されていた。

棺内西端では、勾玉9点、管玉30点、丸玉48点、小玉76点、

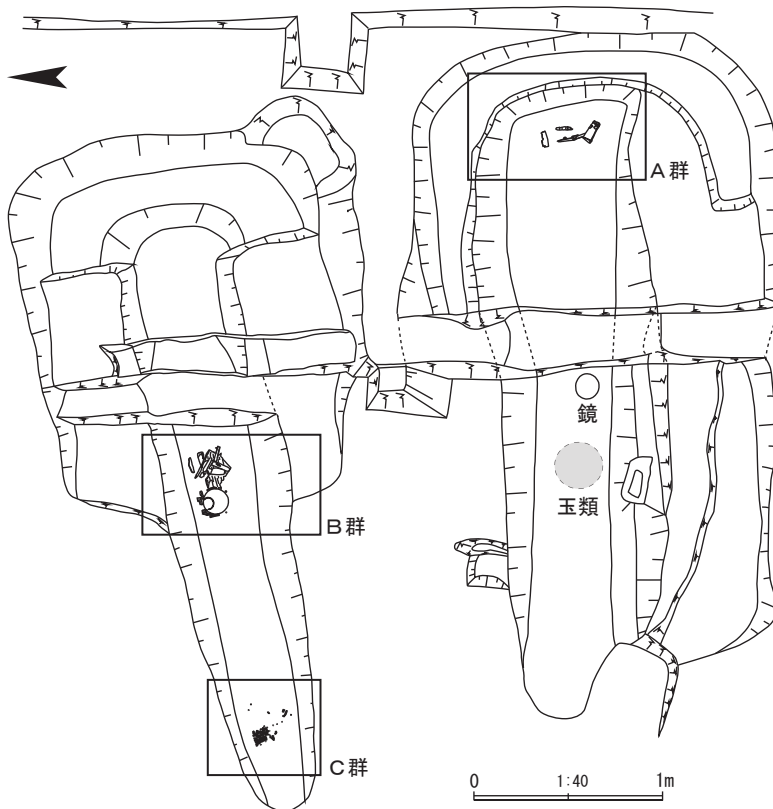


図1 安威1号墳遺物出土状況図（右：1号粘土槨 左：2号粘土槨）

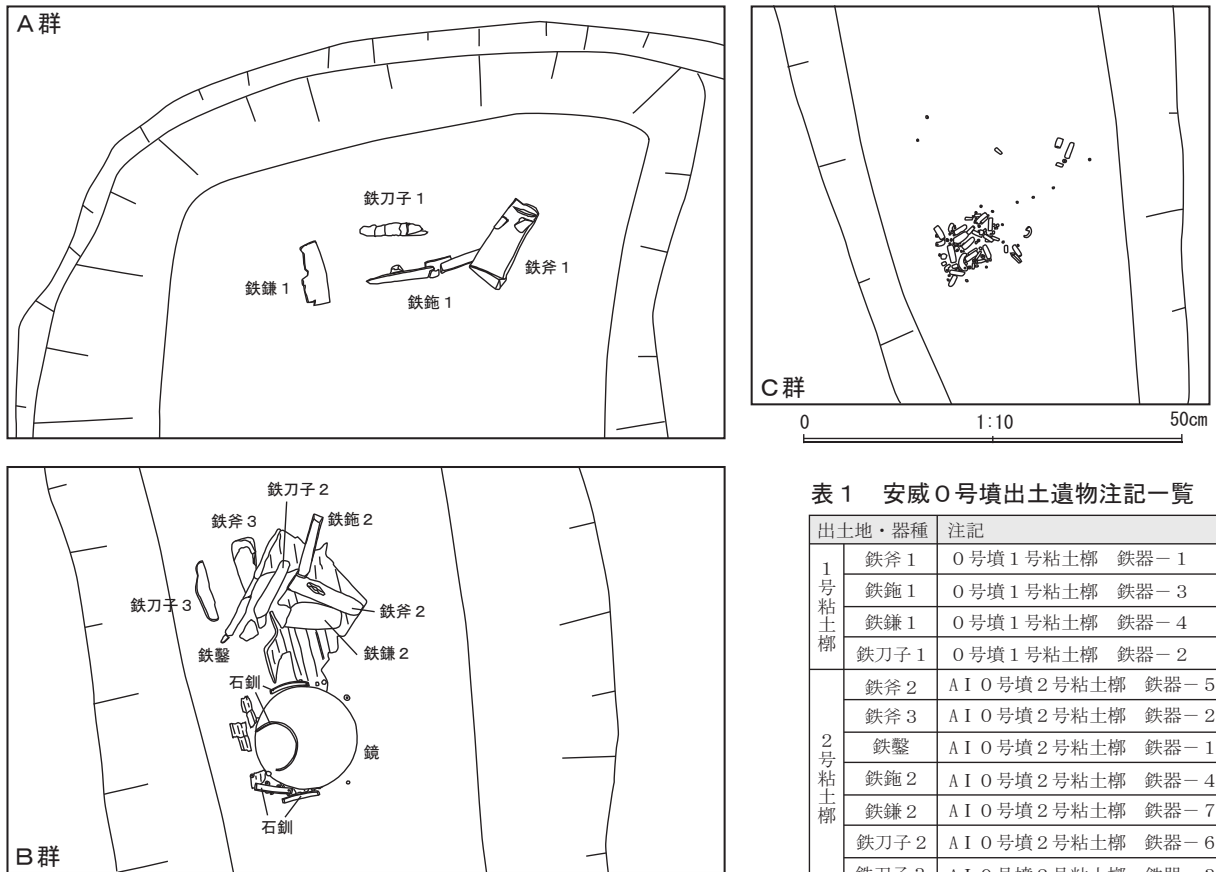


図2 安威0号墳遺物出土状況拡大図 (A～C群)

表1 安威0号墳出土遺物注記一覧

出土地・器種		注記
1号粘土槨	鉄斧1	0号墳1号粘土槨 鉄器-1
	鉄鉈1	0号墳1号粘土槨 鉄器-3
	鉄鎌1	0号墳1号粘土槨 鉄器-4
	鉄刀子1	0号墳1号粘土槨 鉄器-2
2号粘土槨	鉄斧2	AI0号墳2号粘土槨 鉄器-5
	鉄斧3	AI0号墳2号粘土槨 鉄器-2
	鉄鑿	AI0号墳2号粘土槨 鉄器-1
	鉄鉈2	AI0号墳2号粘土槨 鉄器-4
	鉄鎌2	AI0号墳2号粘土槨 鉄器-7
	鉄刀子2	AI0号墳2号粘土槨 鉄器-6
	鉄刀子3	AI0号墳2号粘土槨 鉄器-3

棗玉1点がかたまって出土している。

また、「上部を覆っていた粘土中から鉄片が混入した状態で出土した」(奥井1982)が、その詳細は不明である。(清水)

### 3. 安威0号墳出土の鉄製品

前回報告では、鉄斧、鉄鉈、鉄鎌の一部を報告した(河野・清水2016)。今回、安威0号墳から出土したすべての鉄製品を実見し、図化、撮影をすることができたので、その全貌をここで明らかにしたい(図3、写真2)。

前回報告で鉄鉈としているものは、接合検討の進展により鉄鑿とわかり、これとは別に鉄鉈があると判明した。安威0号墳では2つの粘土槨から鉄製品が出土しており、1号粘土槨では鉄斧1点(短冊形鉄斧1点)、鉄鉈1点、鉄鎌1点、鉄刀子1点を確認できる。2号粘土槨では鉄斧2点(短冊形鉄斧1点、有袋鉄斧1点)、鉄鑿1点、鉄鉈2点、鉄鎌1点、鉄刀子2点を確認できる。なお、各遺物には出土地点を示した札と共に保管されており(表1)、図化はしていないものの1号粘土槨からは各鉄製品にともなう細片が8点確認でき

る。

#### (1) 1号粘土槨

鉄斧1と鉄鎌1は前回報告で事実記載を示した(河野・清水2016)。そのため今回は、新たに鉄鉈1、鉄刀子1について報告する。

**鉄鉈1** 3片に分離するも接合すれば完形品になる。刃部先端は錆のため不明瞭であるものの、柳葉の刃部にはほぼ同じ幅の茎部が続く。刃部の表面には鑄がつき、裏面には裏すきをもつ。鉈でよくみられる刃部の反りはほとんどない。茎部は断面長方形であり、端は直線的でコ字状となる。裏面および両側面には木柄の痕跡がはっきりと残り、表面には粘土が付着する。全長15.0cm、刃部長2.7cm、刃部幅1.0～1.1cm、茎部長12.3cm、茎幅1.0cm、厚さ3.5mm。

**鉄刀子1** 3片に分離しており、関付近で2片が接合する。刃部と比べて茎部はやや短く、刃部と茎部の間には刃関がつく。刃部にはおそらく木棺に由来する木質が錆着し、茎部には木柄がやや軸を斜めにして錆着している。もう一方の面には、粘土が幅広く付着していた。全長13cm(推定)、刃部長10cm(推定)、刃部最大幅2.1cm、茎部長

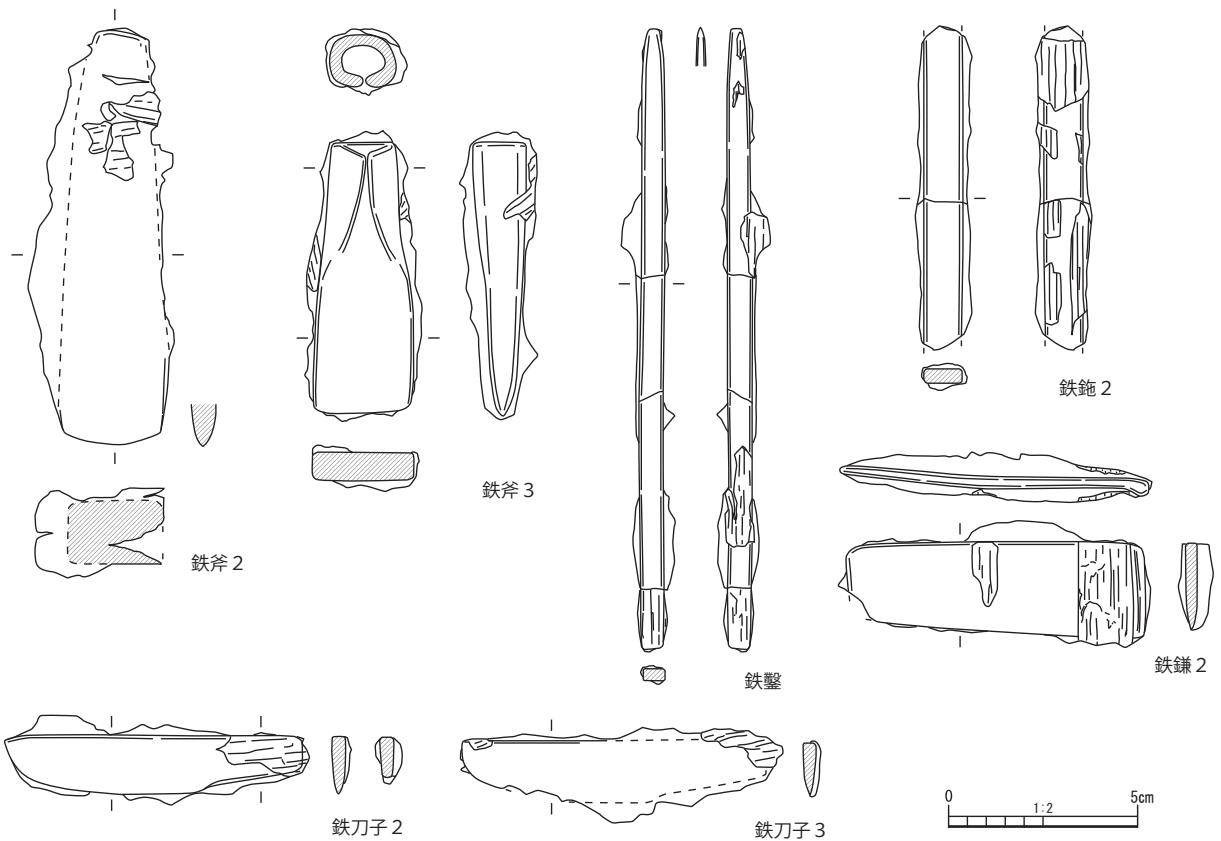
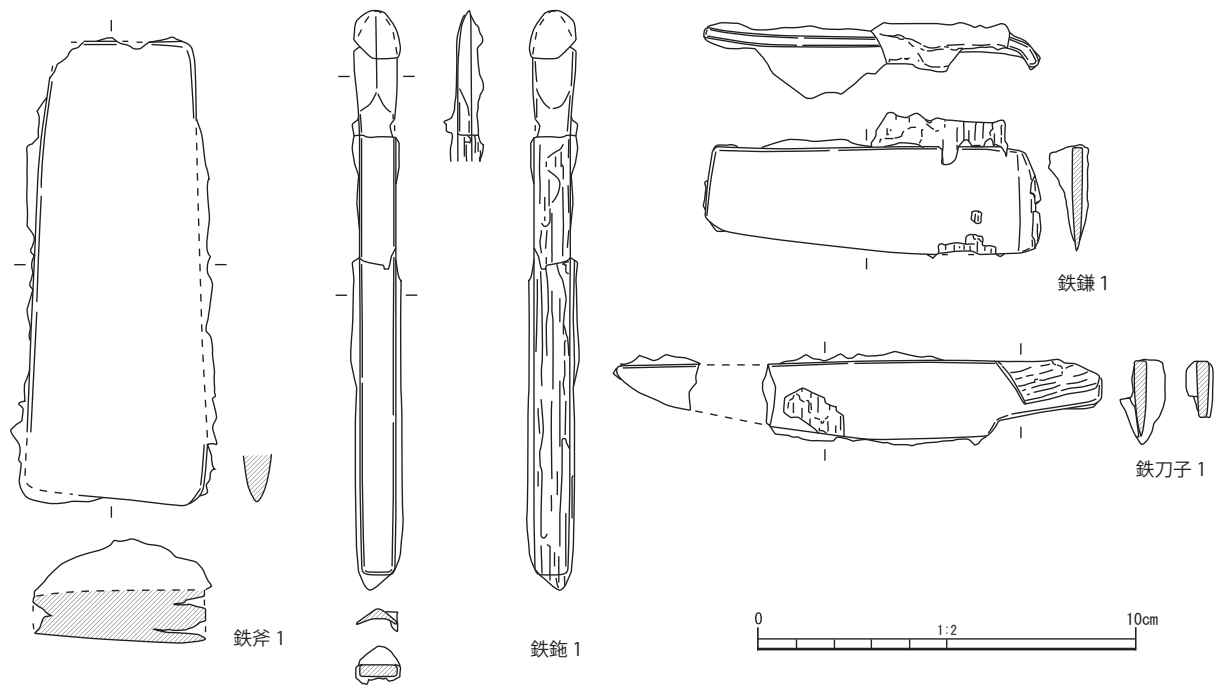


図3 安威0号墳出土の農工具（上：1号粘土槲 下：2号粘土槲）

3.0 cm、茎部幅 1.0 ～ 1.9 cm。厚さ 3.5 mm。

(2) 2号粘土槲

鉄斧 2は前回報告で事実記載を示した（河野・清水 2016）。そのため今回は、新たに鉄斧 3、鉄鑿、

鉄鉋 2、鉄鎌 2、鉄刀子 2、鉄刀子 3について報告する。

**鉄斧 3** 完形品である。袋部をもつ有袋鉄斧であり、袋部と刃部を比べると、わずかに刃部の横

幅が広がっているが、肩は張り出しておらず無肩の鉄斧といえる。袋部の合わせ目は上端でわずかに密着して、袋部の刃部よりの部分は「ハ」状に開く。袋部横断面は楕円形をなす。側面を観察すると、刃部が一方に傾くことはなく、ほぼ垂直にのびる。わずかに木柄とは関係のない木質が錆着し、合わせ目のない面には粘土が付着している。全長 7.2 cm、袋部幅 1.6～2.2 cm、刃部最大幅 2.6 cm、刃部最大高 1.0 cm、袋部最大高 1.4 cm、袋部厚 3 mm。

**鉄鑿** 前回報告では鉄鉈として報告したが、新たに 2 片みつかり接合し再検討を行った結果、4 片からなる完形の鉄鑿とわかった。断面長方形の茎は長く、表裏面ともに木質が茎に平行して錆着している。断面線を入れた面に粘土が多く付着しており、逆の面は木質の錆着が目立つ。全長 16.4 cm、幅 3.5～6 mm、厚さ 3 mm。

**鉄鎌 2** 2 片に分離して接合する茎部片である。裏面には木柄に由来する木質が錆着している。茎部断面は長方形である。残存長 8.5 cm、幅 1.0 cm、厚さ 4 mm。

**鉄鎌 2** 刃先が一部欠損するものの、ほぼ完形の直刃鎌である。背・刃ともに直線的であり、刃縁はわずかに外側に傾き、基端付近から先端の刃先にいくに従い徐々に細くなる「直線刃 1 類」(河野 2014a) という類型にあたり、刃先はコ字状となる。両刃であり、刃縁を手前にして、折り返しを右に置いた場合に折り返しが表面になる「甲技法」(都出 1967) である。基端全体をわずかに折り返し、着柄角度は直角となる。その直角の着柄角度に沿う形で、木柄の装着痕が表裏面に残る。表面には木棺などに由来する木質が錆着しており、裏面には粘土が付着している。側面を観察すると、基端から刃先側にかけて直線的だが、刃先付近は裏面側に緩やかに湾曲する。横幅 8.0 cm、縦幅 2.5 cm、厚さ 3 mm、木柄幅 1.4 cm。

**鉄刀子 2** 完形品である。刃部はやや短く、刃部と茎部の間には、はっきりとしないものの刃関がつく。茎部の表裏面には、木柄が錆着している。図化した面には粘土が付着しており、反対の面の刃部にはおそらく木棺に由来する木質が錆着している。全長 7.9 cm、刃部長 5.3 cm、刃部最大幅 1.5 cm、茎部長 2.6 cm、茎部幅 0.9～1.5 cm、厚さ 4 mm。

**鉄刀子 3** 完形品である。ほとんど鉄刀子 2 と同じ形状と考えられるが、図化した面に砂や砂利が厚く付着し、刃部先端付近には木質が錆着しており、反対の面には粘土が付着しているゆえに、もとの形状を復元するのは困難である。茎部には木柄がやや軸を斜めにして錆着している。全長 7.9 cm、刃部長 5.3 cm、刃部最大幅 1.5 cm、茎部長 2.6 cm、茎部幅 0.9～1.5 cm、厚さ 4 mm。

(河野)

#### 4. 考察

##### (1) 鉄製品の出土状況とその付着物

鉄製品の出土状況およびその付着物から、埋葬後の棺内の堆積、および粘土槨の構造について検討をおこないたい。

本稿で報告をおこなった鉄製品は前回報告のものとは異なり、出土して以降クリーニングや保存処理をおこなわずに保管していたため、粘土槨由来と考えられる粘土の付着を確認できる個体が多い。とりわけ、1 号粘土槨の鉄刀子 1、2 号粘土槨の鉄鑿、鉄鎌 2、鉄刀子 2 では片面に粘土槨由来と考えられる粘土の、もう一方の面には木棺に由来と考えられる木質の付着を確認できる。これらの付着物から、埋葬後の木棺崩壊により流れ込んできた被覆粘土が副葬されていた鉄製品の上面に付着した一方、下面には木棺の木質が付着したと考えることができる。

また、2 号粘土槨の鉄刀子 3 は片面には粘土槨由来と考えられる粘土が、もう一方の面には砂や砂利が厚く付着している。この砂や砂利は地山由来のものと考えられる。鉄刀子 3 は出土した鉄製品のなかでも最も棺側面に近い地点にあったため、砂や砂利の付着は側面上方から流入した砂をもろに受けた結果と想定できる。この想定は、粘土槨の被覆粘土は薄かったことを推測させる。

被覆粘土は時期が新しくなるにつれて、薄くなっていくことが知られている。前回報告では被覆粘土については不明であるとした(清水 2016)が、上記の検討結果から、安威 0 号墳の被覆粘土は簡略化していた可能性が高い。安威 0 号墳の築造時期については副葬品および粘土槨から前期末～中期初頭(廣瀬 2014、河野・清水 2016、清水 2016)と考えられており、上記の知見はこれらの見解と整合的である。(清水)

## (2) 鉄製品

前回報告では、農工具から古墳の時期を検討し、前期末～中期初頭とする従来の年代観と矛盾しない点を示した。さらに農工具は実用品であり使用もされているが、使用の頻度は多くない点にも言及した。まだ使用できるものを副葬するというアイテム選びの余裕さから、ある程度の高い地位を持った被葬者像を想定した(河野・清水 2016)。今回新たに農工具を報告して全容が判明したので、前回報告の考えが追認できるのか検討するとともに、1号粘土槨と2号粘土槨出土品を比較検討することで、農工具の非実用品化への過程についての問題について追及したい。

**時期** 前回報告では、1号粘土槨から出土した鉄鎌1と鉄斧1、2号粘土槨から出土した鉄斧2から、安威0号墳の時期は中期にまで新しくなる可能性はあるものの、古墳時代前期の範疇で捉えられると考えた(河野・清水 2016)。

今回報告分をみると、鉄刀子1～3は刃関であり、幅広い刃部と短い茎部をもつ「刃関短小直茎タイプ」にあたり前期から中期前半によくみられる(池淵 2005)。鉄鎌2は鉄鎌1と位置づけは同じで「直刃鎌1類」に相当し、古墳時代前期から中期にかけて幅広く確認できる(河野 2014a)。

鉄斧3は小型の無肩鉄斧「II B1類」、鉄鉈1は柳葉の刃部に同じ幅の茎部(身部)がつく「II a類」、鉄鑿は無肩の華奢なタイプの茎鑿「II Ba類」であり、いずれも古墳時代当初から存在して古墳時代を通してよくみられる(野島 2013)。

このように農工具の類型から時期を絞ることは困難であるが、安威0号墳を前期末～中期初頭とする従来の意見(廣瀬 2014)との齟齬は認められなかった。

**非実用品** 前回報告の考察で、安威0号墳出土農工具は、大きさや厚さの面も考慮すると、非実用品とするよりも実用品とみてよい点を論じた(河野・清水 2016)。今回報告した農工具を個々でみた場合、すべてが実用品として判断してしまいそうである。

しかしながら、1号粘土槨と2号粘土槨出土品を見比べてみると、両者にはやや異なる点がある。例えば、2つの粘土槨で共通して出土している鉄斧(短冊形鉄斧)、鉄刀子、鉄鎌を比較すると、いずれも1号粘土槨のほうが大きいことに気

づく。2号粘土槨の鉄斧(有袋鉄斧)も、通有のものとは比べやや小さい。また大きさのみならず、鉄鎌は折り返しが2号粘土槨の方が弱くなっており、強固な着柄も望めない。2号粘土槨の有袋鉄斧(鉄斧3)は、手斧としての用途が想定できる。手斧は刃部が木器を加工する為に一方に傾くことが多いものの、本資料は傾かず袋部と刃部の軸が同じである。すなわち、2号粘土槨の出土品は複数器種において連動して小さくなっており、着柄の脆弱さなど非実用的な要素も認められる。また、明瞭な使用痕も確認できないことから、2号粘土槨の鉄斧、鉄刀子、鉄鎌は祭祀や儀礼のために製作された非実用品である可能性が高い。

農工具の非実用品は、前期後半より確認することができる(河野 2014b)。その非実用品とは、大型化や小型化、着柄の脆弱さ、装飾(振じりや線刻)や材質転化(鉄柄や金銅)、等で判断でき様々ある。そこで今回、安威0号墳出土品を分析するにあたり、実用品から非実用品への過程における小型化に注目してみる。

小形の非実用品が出現する理由としては、日本列島の前期後半から祭祀や儀礼の道具として小型化が進行した場合と、朝鮮半島南部から日本列島へ中期に入り小型品が伝来した場合とがある(門田 1999ほか)。安威0号墳は粘土槨の位置や土層の切り合い関係から、1号粘土槨よりも2号粘土槨の方がほぼ時期を同じくしつつも後出する(清水 2016)。そのため、前期末から中期初頭にかけての近接した時期における農工具の小型化を示す良好な事例として、つまり祭祀や儀礼に使用するために日本列島内で独自に小型化が進んだ過程を示すうえで、安威0号墳出土品は極めて重要な事例であると評価できる。一見すると2号粘土槨の農工具は実用品として使えうるものであるが、もはや祭祀や儀礼における利用目的のため製作された非実用品である可能性が高いといえる。かつて筆者は、鉄鎌の使用状況の分析をした際に、横幅8cm未満の直刃鎌は非実用品である可能性が高い点を指摘したことがあり、今回報告した2号粘土槨の直刃鎌(鉄鎌2)は横幅8cmであるため整合的である(河野 2014a)。このように非実用品が含まれるのは前期後半以降(河野 2014b)であり、さきほど言及したように安威0号墳が前期末～中期初頭に位置づけられるとした成果とも矛盾

しない。

**階層** 非実用品が含まれる古墳は、古墳の墳丘規模や形状から被葬者の階層が高い傾向にある(河野 2014a)。安威0号墳の場合、初葬は1号粘土槨であり、その際の墳丘は直径15mの円墳と被葬者の階層はさほど高くないが、追葬となる2号粘土槨には先述したように非実用品が含まれている点は重要である。粘土槨は一部破壊されているので曖昧さが残るが、1号粘土槨の農工具は4種類4点、2号粘土槨の農工具は6種類7点と質量ともに豊富になっている。この点もあわせて考えると、初葬である1号粘土槨の被葬者よりも、追葬にあたる2号粘土槨の被葬者の方が、格は高い人物であった可能性が指摘できる。これは2号粘土槨にのみ石釧が副葬されており、玉の種類や量が多い(奥井 1982) という結果とも矛盾しない。(河野)

#### 5. おわりに

安威0号墳遺物の出土状況図を提示するとともに、未報告の鉄製品を紹介し、鉄製品の全貌を明らかにした。前回報告とあわせて、安威0号墳は前期末から中期初頭に位置づけられるという従来の考えは、農工具の様相および粘土槨の構造からみても矛盾しないことがわかった。

また、2つの粘土槨出土品を比較できる利点を生かし、農工具の小型化(非実用品化)の過程を追及した。そして1号粘土槨よりも2号粘土槨の被葬者の方が格は高い点も、農工具の質量をみて指摘した。(河野・清水)

#### 註

1) 各出土状況図と掘方最終図のあわせこみについては、出土状況をおさめた写真を参考にあわせたため、若干の誤差がある。また、1号粘土槨の鏡の出土位置

についても、写真から復原した。玉類の出土位置については、奥井 1982 の「鏡より西へ約 0.4m」を参考に位置を推測した。

2) 奥井 1982 では、2号粘土槨の鉄製品は「鏡をとり除くと」出土したとある。しかし、出土状況図からは鏡のすぐ東側で出土していたことがわかる。

#### 参考文献(五十音順)

- 池淵俊一 2005 「山陰における古墳時代前半期鉄器の様相」『考古論集 川越哲志先生退官記念論集』川越哲志先生退官記念事業会 pp. 435-454
- 奥井哲秀 1982 「茨木市安威0号墳、1号墳の調査」『大阪文化誌』第15号 財団法人大阪府文化財センター pp. 29-38
- 河野正訓 2014a 『古墳時代の農具研究—鉄製刃先の基礎的検討をもとに—』雄山閣
- 河野正訓 2014b 「古墳時代前期の農工漁具の編年」『前期古墳編年を再考する—広域編年再構築の試み—発表要旨集・資料集』中国四国前方後円墳研究会第17回研究集会 pp. 101-112
- 河野正訓・清水邦彦 2016 「茨木市安威0号墳から出土した鉄製品(1)」『茨木市立文化財資料館館報』第1号 茨木市立文化財資料館 pp. 1-4
- 清水邦彦 2016 「茨木市安威0号墳の粘土槨について」『茨木市立文化財資料館館報』第1号 茨木市立文化財資料館 pp. 5-7
- 野島永 2013 「⑩鉄製農工漁具」『古墳時代の考古学4 副葬品の型式と編年』同成社 pp. 136-145
- 廣瀬覚 2014 「安威古墳群」『新修 茨木市史』第七卷(史料編 考古) 茨木市 pp. 266-272
- 森田克行 2006 『今城塚と三島古墳群』同成社
- 門田誠一 1999 「古墳時代の鉄製模型農工具と渡来系集団」『史学論集』佛教大学文学部史学科創設三十周年記念論集刊行会 pp. 15-35

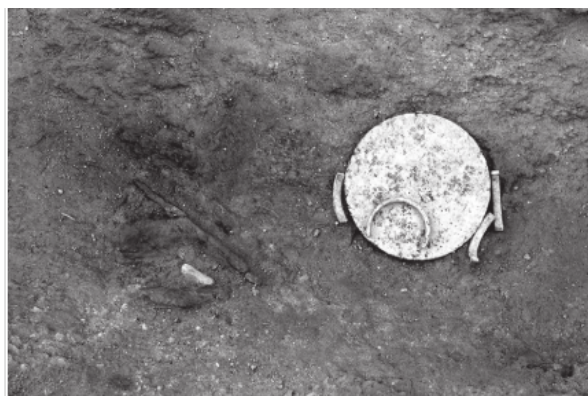


写真1 安威0号墳の鉄製品等出土状況(左:1号粘土槨 右:2号粘土槨)

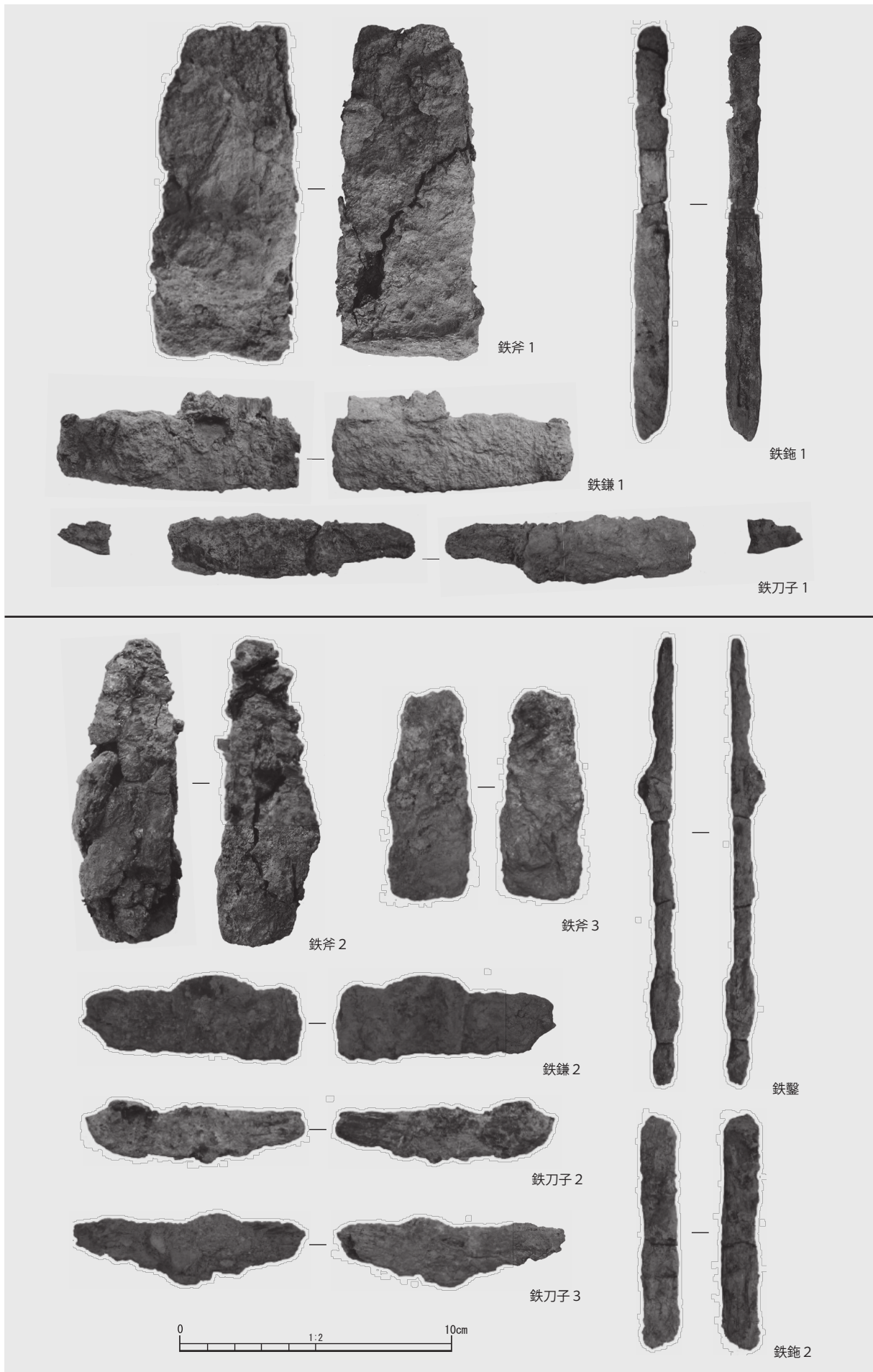


写真2 安威0号墳出土の農工具（上：1号粘土槨 下：2号粘土槨）